

氷雪の地獄図

抑留の事実を風物化するなかれ

新潟県 猪俣 国雄

「今日から我々は天皇の軍隊ではなくなり、マッカーサーの軍隊となった」部隊長が司令塔から夏の暑い風を受けてなびく吹き流しの前の滑走路の周りに集合した部隊全員に悲痛な面持ちで怒号説明したのが終戦を知った最初であった。少年飛行兵が特攻機に飛び乗って自爆する。通信隊が自動車隊とともに、食糧、弾薬を積載してどこへともなく出発、部隊副官行方不明、朝鮮人保安隊の暴動、日本窒素呉南工場の焼き打ちの炎が夏空を焦がす。北からの避難民が陸統と後を絶たず、憔悴した親に抱かれた幼児の泣き声が痛ましく聞こえてくる。朝鮮威鏡南道咸州郡連浦面、朝鮮第百部隊、特攻隊の基地でもあった終戦当時の一面である。隣接した仙徳面の偵察飛行隊の病院跡に収容され、

九月二十三日「トウキョウダモイ」「スコラダモイ」の声とマンドリン自動小銃に背中を小突かれながらの呉南港までの死の行軍、「二緒に連れてって」と泣きながらとりすがる窒素社員邦人婦女子がソ連軍に威嚇されて離される中を乗船、函館ではないかと疑ったのもつかの間、ナホトカ港岸壁着、関東軍名入りの天幕収容所に収容され、「検査」と称しながらの携行品の略奪の日々、ここでふるさとに持ち帰るために許されていた飛行服、飛行時計、国民服、編上靴等々が略奪され、わずかに残った米、航空食、甘味品、調味料で、明日は殺されるかも知れない不安感から、今のうちに贅食をしようと、飯ごう食をつくり、腹を満たす。港湾使役に毎日動員される。日本軍からの略奪物品の荷揚げ作業である。阿吽の呼吸でお互いに酒やこれほと思う食品を持ち帰り馳走をつくる。

シベリアの気候は冬と夏しかないとと思われる、朝晩の冷気は寒さを加えてきた。

十一月の初旬か中旬ごろだったろうか、各天幕収容所に収容されていた将兵が広場に集められ労働大隊が

編成された。

旧各部隊から何十名宛を引き抜きして団結しての暴動的な力を抑制しようとの意図が現われた編成である。関東軍から奪ったであろう防寒服、防寒具が支給され、各隊ごとに出発、我々の大隊は貨車でアルチョム駅で下車を命じられ、老共産党員と自動小銃に囲まれながら徒歩で数十分、馬を追い出した馬小屋に収容される。電気設備がないので近くから白樺の皮をとってきて明かりとする。二段の丸太組み立ての寝床に乾草を敷き防寒のため携帯した毛布、さらに防寒外套で寒気を凌ぐことにした。ドラム缶でベーチカ代わりの暖炉とする。翌日からは原始林とも思われる早くも氷雪に覆われたところでの伐採が入ソ以来に二度目の作業であった。「ピラ（二人引きのこぎり）」を渡され二名一組で林の一番奥の大木を切り倒すのであるが、今まで経験のない押しのかぎりなので要領を覚えるのに時間をする。私の相手は北海道出身で鉄舟部隊員だった。かなりの時間を使って大木が音を立てて倒れる。枝をタポールで落とす組、五メートルくらいに大木を切る組、

馬そりに材木を積み氷雪の山道をトラック積み込み場まで走り降りる組（死傷者が最も多く出た作業班）、材木をトラックに乗せ貨車まで運搬する組、貨車に積み込む組、大体こうした作業順序と作業班編成であった。食糧は酸味のある黒パン二百五十グラムくらい、時にはピンハネされることもあった。岩塩親指くらい、砂糖同量、何粒か大豆またはコウリヤンの入ったスーブ少々、以上が日々の食糧で零下四十度にも下がる気温の中、原始林での伐採作業、きついノルマ制の日々は飢えと寒さ、生きる限界とも思われる食糧環境で怪我人、栄養失調などの病気患者の急増で、多いときには数十人、少なくて十名近くの犠牲者を出す状態である。

私の経験したシベリア抑留中の最も悲惨な収容所生活がこの伐採作業であり、大木のコケ、実を初め、食べられると思うものは何でも片っ端から口にしたり。

自動小銃を持って警戒するソ連兵が馬鈴薯の皮をむいて捨てると、ワースとばかり撃たれそうになる危険を省みることなく何人かが群がり寄った。木の汁を

とって飯ごうで煮詰めて飲む、まさに生きんがための地獄図そのものであった。そのうち、余りの犠牲者激増と交渉の効果かは知らないが、軍医が派遣されてきた。

眼病疾患者のためにソ連側と交渉して鮭の目玉が用いられた。体温の異常な者や、怪我人の作業休みも許されるようになり、離れた丸太小屋に運び入れた石を積み重ねた蒸し風呂（氷や雪を熱した石にかけて蒸気を発生させ雪を解かした水を何回もかけ、雪水を沸かした湯を用いて体を洗う）（バーニャ）で、やせ細った体を清め、虱はパチパチと音を立てて襦袢から、ズボンから無数に焼けた石に落として身につける。地獄図生活の中で、わずかながら生氣を取り戻す唯一の時間帯がこのバーニャであった。

こうした厳しいシベリアにも春が訪れて来る。後でわかったことだが、シベリアの春と秋はほんの一瞬、一年は夏と冬が大半といってよい気候である。でもそのわずかな春は木々の葉からやってくる。山の氷や雪が少しずつ解けたゆえか谷川のせせらぎがわずかな音

を立て始め、名も知らぬ鳥の鳴き声が聞こえてくる。

しかし夜ともなると遠吠えする狼の鳴き声が不気味である。尊い犠牲となった仲間の屍を食べ荒らすのだと後でわかった。時折監視哨からの銃声が狼の鳴き声を一瞬ではあるが遮断するが、暁闇までは続くのが常であった。そうこうするうち、異常な高熱が私を襲ってきた。体がガタガタ震えてやまない。軍医が来て熱をはかる。四十度以上だと言う言葉を聞きながら氣を失った。

氣がつくと、ソ連の将校が何か軍医と話し合っている。軍医が「南方でもらった潜伏性マラリアで、絶対安静でないと栄養失調症と重なって生命が危ない。いま入院を交渉中だ」とのこと、ソ連将校が「チンピラートルムノーガ、スコーラポメライ」という（熱が高く続いている。間もなく死ぬだろう）。

ソ連という極寒地ではマラリアなどという病氣はない。そうだからわかるはずもない。

急性肺炎という病名をつけられて入院となり、わずかばかりの装具とともにスチュードベーカー（戦争用

としてアメリカから送られてきた軍用トラック）に乗せられた。四名の入院者が居合わせた。二名は栄養失調症でやせ衰えて、目玉ばかりが異様に光っている。

一名は伐採で片足と片手、それに頭をけがし応急手当での仮包帯姿であった。

乾草の上で横たわっていた一人が右手を挙げ何か口走っている。隣の包帯姿が耳を寄せている。手から何かを受け取った。震えながら手が静かにおろされた。目か閉ざされ、口が震えながら静かに閉まった。臨終であった。

包帯姿が私にささやいた「東京の貯金局にいる母に軍隊で貯めた預金通帳を渡したい。名前は横田、頼む」と言われたそうである。不自由な体でみんなで合掌した。

三十分ぐらいだったと思う時間でトラックが止まった。病院である。助手台からソ連兵が降りて来て下車を手まねで命じる。

横田君がおろされ病院内へ消えていった。歩哨が収容所から持ってきたカードを病院側の受付へ渡し、私

たちはソ連式のバーニヤ（前述）へと装具とともに入れられ、装具はバーニヤに隣合った消毒室へ着衣と一緒にに消毒のために入れられ裸姿に名も知らない木の葉で看護姿の白衣がこすりつけ、蒸気で流れる汗を石けんでこする。三分間ぐらいで罪が開き、消毒した着衣を着る。装具を受け取ると「エジスダー（後についてこい）」と手で招く。後に続く。関東軍名が記された天幕病棟に連れて行かれ病床に案内された。収容所と違って平屋式でわら布団（軍隊でおなじみのもの）に白い敷布と毛布があり、装具（もはやとられるものは何もない）は奥の頭の方にある。

十六か七歳ぐらいと思われる看護婦（シスター）と中尉の肩章が見える女軍医がハラートと呼ばれる白衣をまとい、通訳と思われる軍服姿の男を伴ってまぐら元に来て何やら話し合い、カルテ（収容所名、病名、名前、生年月日、その他経歴や参考事項が記入されているものと推察）を見ながら脈をとり、熱をはかる。看護婦がまた一名増え、注射器具を持ってきた。注射液はブドウ糖とすぐにわかった。消毒液で消毒、左右

両腕に注射された。速成の看護婦のゆえか至って乱暴なやり方で、何やら注射器のガラス片が液と一緒に入ったゆえか痛い。

二日ぐらいでマラリア熱が下がったが、注射跡がはれ上がって痛い。看護婦が来て、はれた両腕のところを消毒しメスを入れた。うみが出た。運ばれてきたカーシャ（飯）がうまい。羊肉、サラダもうまい。気持ちよくなり、熱もなく、身内を元氣な血がよみがえってくる。

十日ぐらいたったころだった。呼出しがあり病院外の将校宿舎の一室に連れていかれ、間もなく中尉の軍服姿に勲章をつけた軍人が通訳を連れて机の向こうに腰かけた。私にもいすにかけよと言う。「おまえの病氣はよくなった。病院の仕事を命じる」私はすぐ言葉を返した。「私は飛行機のことにはよくわかるが、病院の仕事はやったこともない。戦友のいる収容所に返してくれ」「おれはゲ・ペ・ウである。おまえがスターリンの命令を拒むならおれの拳銃で射殺する。おまえは殺されてもだれも文句は言わないぞ」しばらく間を

おいて答えた。

「病院仕事をやる、衛生兵ではないぞ」と、「わかってる、明日からフーサイ中尉（女軍医）の元で働け」こうしてアルチョム特別病院生活が始まった。仕事の内容は、馬そりにドラム缶二本を乗せて、病院裏側ソフホーズ近くに湧き水があり、その水をバケツでドラム缶に汲み入れ、馬そりで病棟棚外の川向こうにある炊事場まで運搬する。炊事場からてんびん棒で食事を病棟まで運び、終わったら片づけて炊事場まで運搬し食器洗浄をする。各病棟の掃除をする。軍医から言われたことはこれを手伝う。大体以上の日課で日々を送り、レニングラード生まれの女軍医（中尉）が「イノモト（猪俣と発音できない）エジスター（こっちへこい）チエースト、チエースト（掃除、掃除）」と、暇だとみるとすぐ呼びつけられた。

手まね、足まねで何とか言葉の意味がわかったら「ダアー」（はい）、わからないときは「ヤ」、「ニエスマナーユ」（知らない）、「ジトー」（それは何ですか）「ジトーエータタコーエ」（これは何ですか、あれは何

ですか）等々、片言ながらのロシア語を覚えざるを得ない。

日本から奪った米粒を一粒あて丁寧に運びながら、病人用食事（ソ連人兼用）カーシャをつくるのには驚かされた。きっとドイツとの激しい戦争で物のありがたさがしみついたゆえと理解した。ロシア人女性の名前もニヤがつくのが多いとみえ、ソルダート（兵隊）たちから、私とともに働いている看護婦が一人はターニヤ、他がソーニヤとわかった。他にワーニヤという看護婦がよく会う。髪の色と体の外見から判断して呼ぶこととした。

私のベッドは伝染病棟の一隅だったが、負傷者が多いため隣合わせになるのは何時も負傷者だった。病人食を少しでも余計に、特に肉は努めてよいところを選んで負傷者に運び回復を願ったが、入院時には重症の差別なく必ず蒸し風呂（バーニヤ）に入れるのが鉄則のゆえか、入院翌日目覚めると亡くなった負傷者が多かった。死亡者のカルテは見ることはできず、軍医記入の後には病院外のゲ・ペ・ウの住む事務室へ持ち去

られ、看護婦二人と三人で病院裏近くの屍置き小屋へタンカで運ぶ作業をやらされるのであった。多いときは日に二十名ぐらい、少なくて五名ぐらいの死体運びと記憶している。いつも屍置きに入るときと出るとき合掌するので看護婦が、シトー、エト、タコーエと聞かれやー、ミッシェオニエール（宣教師）と答えると、ポーニヤル（わかりました）と言って私のまねをして合掌するのだった。

病院勤務で今さらのように驚かされたのは、階級ではなく、自分の持ち場（職種の権利）については頑として譲ることはないということだった。病院の裏門を警備している兵隊（ソルダート）が、水くみに行こうとする私に対して、軍医が私にわき水の向こうにあるパン工場まで行って白パンを持ち帰るよう命じたとき、拳銃を軍医に突きつけながら激しい語調で「ネリジャー（駄目だ）」を繰り返して迫るその責任感にはびっくりさせられた。

こうして三か月ぐらいたったころゲ・ペ・ウに呼ばれ、女軍医中尉フーサエ立会いのもとに「おまえは明

日から病院長のマイヨール（少佐）の当番勤務者をやれ、詳しいことはフーサエ中尉が教える」との命令が出て、私にとって最後の仕事となった病院長当番が始まった。

フーサエ中尉（レニングラード出身）の説明によると、病院長の少佐はフーサエ中尉と同じレニングラード出身、独ソ戦で家族を失いながら、医師として立派な仕事を遂行し、英雄の称号候補にも上がっており、日本通でもある。おまえエノモトの仕事は、朝八時になったら炊事場から薪を一束とガゼータ（新聞）を院長宿舎（炊事場の脇に一棟別に建ててある白亜の家）に持って行き、ドアをノックせよ、「クトーダム（だれか）」と答えたら、エノモトと答えて中に入り、新聞を卓上に置き、前日の新聞でペーチカに火を付け、薪を使って大きな洗面器にお湯を沸かし、沸かしたら院長のベッドに行きガトーフ（準備オーケー）と言う。院長が起きたら洗面の手伝いをする。毎日洗いたてのバスタオルで背中をふき、院長に渡し、ふき終わりを待って新聞を渡す。新聞を読み終わったらコーヒーと

食事ができるように炊婦長から受け取り（おまえの分も一緒に）院長の食卓に並べて「パヂヤールスタ（どうぞ）」院長が「スパーシエーボ（ありがとう）」と言ったら、おまえも向かいに腰かけて一緒におまえの分の食事をせよ。終わったらよく掃除をして帰ってくる。私に「エノモト、セチャース、ダモエ（猪俣、ただいま帰りました）」と報告せよと事細かに説明するのだった。

収容所に仲間が生死限界の中で作業ノルマに追われていることを思いながらも、明日の我が身はわからないが、運がよいなと感じつつ翌日から説明どおりの院長当番仕事についた。

頭の毛は薄く、丸まっこい顔立ち柔和な面相で背は百七十センチぐらい、小太りで背を丸めて歩くせがある。好感のもてるおやじといった感じの院長で、日本語がよくわかり、特に日本の歌舞伎に明るく、六代目菊五郎、市村羽左衛門と名前を出して質問するので、こちらで面食らう始末だった。おかげで今までになく楽な気持ちで食事をともにし、語り合うことのできる

日々が続いた。院長の命令で水くみ場の向こうにあるパン工場に看護婦を伴ってビュールイフリーブ（白パン）を受け取りに行かされた。ロシア語は読めないが、看護婦が受け取ったのでシトエートで覚えていった。パン工場の後ろの山腹に蜂蜜工場があり、時折ルーブル紙幣を持って買いに同伴させられ、こっそりとなめてみたり、わずかながら院長からもらってはパンにつけて食べることもあった。

革命記念日が来て、ソ連の兵隊も看護婦たちも軍医も、満州あたりから奪い取ったであろなか色とりどりのハラート（着物）を着たり眺めたり、ウォッカ（ロシア酒）やビールを飲みながらカザックダンスやタンゴダンスを口笛やバラライカの楽音に合わせて踊り狂うのだった。

「エノモトエジスター（猪俣こっちへ来い）」と言われても、そうした喧噪の場に加わることは気持ちに許すはずもなく、院長の後ろで白パンとウォッカと水を交互に口にしながら彼らを眺めていた。ゲ・ペ・ウが部屋の入口からジーっとその場を見つめてはウォッカ

を飲んでるのが今でも脳裏に印象深く残っている。

革命記念日も過ぎたよく晴れた日、珍しく馬そりで（馬車）水くみを命じられ、行ってみるとア・ラボータ（病気の直った軽作業者）の一人がいた。聞くところによると病院近くの収容所に収容され、帰国までの間をソフホーズ（国営農場）の仕事をやらされているとのことで、ちょうど休憩になっていた。

作業員の中から見覚えのある一人が近づいてきた。

カンボーイ（警備兵）も病院勤務者とわかっており、看護婦のターニヤも同伴しているので別にとがめることはない。話し合っていると、ふるさとは同じ久保田さん（二年ぐらい年長）だった。しばらくは抑留の苦勞話や懐かしいふるさとをしのぶ話だったが、声を強め真剣な面持ちで私に頼み込んできた。

何事ならんと応ずる私に対して、次の言葉が刻みこまれた。「私にはふるさとに残した家族の面倒をみる立場がある。一日も早く家に帰りたい。聞くとこころでは、あなたの病院で祖国帰還を決定するドクトルの診断と判定が行われる。あなたは病院長当番、どうか頼

む、私が早く帰還できるように取り計らってくれないか」ということだった。ターニヤはそれとなく察したらしい、「エノモト、アチエーツ（父） エイスマーチ

（母） エイス・ジェナー（妻） エイススウォーン（子供） エイス・マイヨールガバリ、ハラシヨウ（父母妻子もいると院長に話さない）とのこと盛んに目をパチパチとして同情的な感情を込めて私に何とか院長に頼みなさいという意味深なしぐさだった。私は頼みに答えた「私は今幸いにも院長の当番、院長は日本語もよくわかるので、ターニヤの言ったようにあなたを含めて一人でも多く帰還のサインがなされるよう一生懸命頼んでみます。もしも帰還できたら私の家に寄って、今は特別病院の院長当番で元気でやっているから心配しないで待っていてくれと、伝言をお願いしたい」彼久保田はうなずいて約束した。

二日後、それまで私は知らなかったが、病み上がり
の軽労働者の帰還順序はこの病院で決定されていることがわかった。

診断はフーサエ中尉、決定サインは少佐の院長とゲ

・ペ・ウの中尉と看護婦が教えてくれた。いよいよその時が来た。

およそ三百人ぐらいの人数だったと思う。二列縦隊に並んで診察順を待つのだった。私は院長に朝食時によく話をして了解をとっていたので、この時とばかりゲ・ペ・ウの脇に立っていた。久保田が列の中央ぐら
いから手を挙げた、私が院長にささやいた。「あそこで手を挙げたのが友だちの久保田です。パジャールスタ（何分よろしく）」と院長がフーサエ中尉に耳打ちして久保田さんが呼び出され、カルテらしいカードにサインした後、ゲ・ペ・ウにカードが渡された。サインが終わり一足先に久保田君が私に感謝の目くばせをしながら戸外へ案内されていった。「スバシーボ（ありがとう）」と院長に言う、院長はフーサエ中尉と顔を見合わせてほほ笑んでいた。結局二百名ぐらいは「ダモイ」、百名ぐらいは次回、別々の方角へ連行されて行った。「エノモト、ハラシヨウ」ターニヤがほほ笑み拍手していた。人間ってよいところがあるなあとの実感で胸が熱くなった。しかし「帰還者選び」の場は

私の病院生活ではこれが最初で最後となった。

翌日から従来の作業のほかに、屍屋の遺体解剖の手伝い、屍の埋葬地への運搬の作業を命じられ、最も悲しい抑留者運命を痛感せざるを得なかった。遺体を四〇五人の軍医が解剖しガヤガヤ論の後の縫合を命じられ、畳針のような針で縫合し、屍台へ運搬、五体一緒に馬そりで埋葬地へ運ぶ。軽作業者四〇五人一グループで水上二メートルをカバイ（穴掘り）し遺体を埋葬する。抑留者、男性以外はカルテなしでどこのだれとも全く不明、みんなで合掌し埋葬、墓標代わりに木片を立てた。班長談によると今までに四百八十体ぐらいカバイしたとのことで、助かる命も助かるすべもない悲運に心から涙し、悔しさをお互いの目で語りあった。

一週間ぐらいたったところ、ウラジオ行きを命ぜられ、スチュールドベーカーに乗車、ターニャたちの見送りを受け、はるかなる墓標に合掌し丘陵を縫いながら夏間近のウラジオへ向かった。

ウラジオ港に繫留された半客船が新たな収容所で

「沿海地方講習会」の横看板、左側に「沿海地方楽劇団」の看板が掲示されているのを見上げながらタラップを登った。

抑留死没者のいまだ帰らざる霊に合掌。

【執筆者の紹介】

住所 新潟県小千谷市中央通一丁目

略歴

旧制商業卒

昭和十六年九月各務ヶ原第一航空教育隊入隊

終戦時朝鮮第百部隊。

昭和二十四年八月二十四日舞鶴着

ふるさと市役所奉職。

五十一年退職、NETTY嘱託

全抑協新潟県連広報部長、中央連合会広報担当

現在 小千谷商工会議所議員

住みよい郷土建設協会運営委員

（新潟県 吉田 忍）